

# 韓国人学習者の日本語の文字表記に見られる 音声項目の誤用 長母音を中心に

姜 枝廷

## 要 旨

韓国語と日本語は非常に似ている言語であるといわれており、学習者は他の外国語より学習が容易であると感じる。しかし実際には困難をとまなう学習項目もある。特に発音は自分の母語による干渉が多い。また誤った発音を後から矯正するのも難しいことなので発音は学習初期の段階から定着させることが重要である。

本研究では学習者の日本語表記に現れる誤用の実態を分析することにより、学習者の母語音声からの干渉に焦点を当てて、その実態を明らかにすることを目的とする。韓国語学習者にとって習得と運用が難しいと思われる日本語の音声項目のリストを利用し、日本語音声の習得度が表記に及ぼす影響について論じる。特に韓国人日本語学習者にとって習得が難しいと思われる有声子音・無声子音・特殊拍を扱った。その結果、従来の研究では清音・濁音の誤用が深刻とされていたが、今回の調査では長母音の誤用も多く見られた。

音声教育と作文教育を連携させることにより、より正確性を高めることのできる教育ができるものと考えられる。日本語の長音がなぜ難しいのかについてもさらに研究が必要であろう。

キーワード：母語干渉、音声項目、音声教育、長母音、日本語表記

## はじめに

韓国語と日本語は構造的に非常に似ている言語であると言われているにもかかわらず、韓国人の日本語学習者は間違いをおかす。間違いの原因は日本語に関する知識の不足に起因することは言うまでもないが、「なぜそんな誤りが出てくるのか」と疑問に思われることも多い。両言語が構造的に類似している場合は他の外国語より学習が容易であると一般的に考えられるが、実際には困難を伴う学習項目もある。特に発音は学習者の母語による干渉が多く、また誤った発音を後から矯正するのも難しいこと

なので、発音は学習初期の段階から定着させることが重要である。

本論文では学習者の日本語表記に現れる誤用の実態を分析することにより、学習者の母語音声からの干渉に焦点を当てて、その実態を明らかにすることを試みたい。すでに数多くの先行研究において韓国人日本語学習者にとって習得と運用が難しいと指摘されている日本語の音声項目のリストを利用して調査し、日本語音声の新しい教育方法を求めたいと思う。

韓国人学習者における日本語の音声についてはこれまでさまざまな研究がなされてきた。しかし、日本語音声の習得度が表記におよぼす影響についての議論は乏しい。コミュニケーションの重要な手段である「書くこと」に及ぼす影響については、本格的な議論はあまりなされなかったように思われる。

本研究では中・上級以上の韓国人日本語学習者（在日留学生）に日本語短作文の調査を実施してその結果として現われた音声的問題項目と先行研究との比較を行い、考察を加える。特に韓国人学習者にとって習得が難しいと思われる有声子音と無声子音、及び特殊音素を扱いたい。そのうえで音声教育に対する新しい教授法とカリキュラムを考えたい。

## 先行研究

日本語教育においては一般に、学習者の発音をテストする機会が相対的に少なく、音声指導があまり行われていないのが現状である。そのため、文法や語彙などほかの言語能力が上級レベルになっても、音声の習得が進まない学習者も多く見られる。

### 1. 特殊拍

学習者にとって習得が難しい日本語の音声項目の一つは特殊拍である。助川（1993）が行った日本語学習者（15カ国32名、教育専門家対象）の発音傾向の調査でも長音や促音などの特殊拍の問題が指摘されている。横井（1998）の調査でも同様の結果が報告されているほか、日本語音声の中間言語研究において、特殊拍の知覚と産出に関わる問題は、たびたび指摘されている（杉藤1989、戸田1998b、木村・中岡1990、他）。

### 2. 長母音の生成に関する先行研究

特殊拍の中でも、特に本稿で論じる長母音について先行研究をまとめる。まず、生成に関して、鹿島（1989）は長音を対象にして、日本語話者3名とオーストラリア人日本語学習者3名の発音の音響的な特徴を、持続時間とピッチの側面から検討した。その結果、「外国人学習者の場合、長さに関しては、長母音を十分な長さで発音していないために日本語の特徴であるモーラ性が形成されていない。」（p.80）と指摘し

ている。粕谷・佐藤(1990)は、長音・二連母音と二重母音を音声学的に対照して日本語話者と英語話者の発音を扱い、音響的な母音の渡り部分の持続時間の観点から検討を加えている。その結果のなかで「日本語話者の場合、長音を含む音節の時間長が含まない音節の時間長の常に二倍になるわけでもなく、二倍以下が普通で60%程度の延長でおわっていることもある。」(p.187)と述べている。土屋千尋(1992)ではモンゴル人日本語学習者1人を対象に計5回の追跡調査を行い、日本語の韻律について、日本留学前と日本留学後の発話の変化を比較検討した。その結果、「留学前、語末の長母音が短母音より短く、語中の長母音が短母音より短い現象が見られたが、留学後、日本人の発話中の長母音の長さに似てきたことが確認できた」(pp.157 - 158)と報告している。

### 3. 長母音の知覚に関する先行研究

次に長母音の知覚に関して、李(1992)では、日本語長母音の長さについて、韓国人学習者5名の発音と日本語話者3名の発音を音響的に分析して対照研究を行った。その結果、「長音節上(/cvR/)はほとんど差がなかったが、語全体の持続時間(/cvRcv/)では、韓国人学習者の方が日本語話者より非常に長かった。そのようになったのは、韓国人の閉鎖区間と後続音節の持続時間がかなり長いからである。」(pp.178 - 179)と報告している。李(1993)では、方言が異なる韓国人学習者(全羅道方言話者10名:非ピッチ言語、慶尚道方言10名:ピッチ方言)を対象に、日本語長母音の知覚実験(識別実験)を行い、それぞれの結果と日本語話者の結果との比較分析を行った。また、学習者の日本語長母音の識別において、方言の違いによる知覚差異があるかどうかについても検討した。その結果、「両学習者とも日本人に比べ、長母音の識別の精度がかなり低かった。しかし、長母音の識別において方言の違いによる顕著な差異は見られなかった。」(p.12)と述べている。皆川(1995)では、英語話者と韓国語話者を対象に、日本語長音の知覚実験(弁別実験)を行い、母語特徴と日本語長音の知覚の関連性について、また、語環境(長音位置、ピッチパターン)がどのように日本語長音の知覚に影響を与えるかを検討した。その結果、「母音長の長短対立を持つ韓国語話者にとって、対立を持たぬ英語話者より語中の長音の知覚が平易であったことより、母語における母音の長短対立に関する特性が、長音の知覚に正の影響を与えていたからであると考えられる。また、語環境によって長音の知覚に難易差が確認され、語頭より語末の長音が知覚されにくく、さらに長音部のピッチがLであると知覚されにくい」(pp.56 - 57)と報告している。前川・助川(1995)では、母語方言(ソウル、慶尚道、全羅道)が異なる韓国人学習者を対象に日本語長母音の知覚実験を行いピッチが知覚に及ぼす影響、学習者の方言差の存在、範疇知覚の存在について分析した。その結果「日本語話者と韓国人学習者はいずれにおいても母音延長時間の増大にともなって長母音知覚の確率が増加していくことは共通しているが、増加のありさまは異

なっている。すなわち韓国人学習者は日本語話者に比べて弁別精度が粗いということになる。また、ピッチと長母音の知覚関係については、ピッチが長母音の知覚に影響を及ぼすことが実証されたといえる。なお日本語長母音の知覚において学習者の母音方言の影響も観察されたと報告している。

#### 4. 有声子音・無声子音

また、有声子音・無声子音の混乱も度々指摘されている。山田(1963)、李明姫(1986)、馬瀬 他(1997)、横山(1997)、中東(1999)などの多くの実験結果によると、有声音・無声音の聞き分けは、語頭では困難だが、語中では困難ではないという結果が出ている。これは、多くの学習者が、日本語の有声音・無声音の対立を「平音・濃音」の対立と捉えているためだと解釈されている。ただし発音の面では濃音は喉頭化音なので、母音間で「促音に聞こえたり、なんとなくぎこちないかたい感じの発音に聞こえる」(梅田1985)ことがある。

以上の研究は生成や知覚に関する研究であって、音声を文字表記の面から扱っている研究は乏しい。一つ注目できる研究は許晃会(1991)の韓国人日本語学習者の作文に現れる片仮名表記の誤用例の調査があり、長母音に関する誤用の多さを報告している。

そこで本稿においては、以上の先行研究をふまえつつ、日本語の作文に現れる文字表記の状況を分析して学習者にとって習得が難しいとされる音声について研究し、より効果の高い日本語音声教育法の開発につなげたい。

以下に調査と考察の詳細を述べる。

## 調 査

### 1. 調査語彙の選定

韓国人学習者にとってその習得と運用が難しいと予想されている日本語音声項目についてはすでに多くの日本語教育研究者たちによる研究結果が報告されている。本研究では特に李明姫(1991)、李炯宰(1992、1993、1997)、大室(1996)、前川(1997)などの先行研究でも多く述べられている(1)清音と濁音(無声子音と有声音)(2)特殊音素(促音/Q/、長母音/R/、撥音/N/)(3)直音と拗音の項目に焦点をあてる。先行研究を参考に、表1に掲げる調査対象語彙を選定した。調査対象となる音声項目は、一つの語彙に重複して現れている場合も多い(例 か ん こく)。

### 2. 調査方法と被調査者

韓国語の短い文を準備して、これを日本語で訳す課題を設定した。調査シートにお

表1 日本語短作文において誤りやすい音声項目別<sup>(1)</sup>の語例

清音↔濁音	長音	促音	撥音	拗音↔直音
かんこく	だいひょう	しけん	かんこく	だいひょう
だいひょう	こんしゅう	じっさい	こんしゅう	りょうり
たべもの	りょう	みっか	じゅんび	こんしゅう
こんしゅう	うんてんめんきょ	ねこ	にんぎょう	りょう
がいこく	ごうかく	にて	けんきゅう	じゅんび
じゅんび	じゅけん	じっけん	たんとう	じゅけん
ごうかく	いっしょ	がっこう	しゃしん	いっしょ
しごと	しゅるい	ざっし	こうえん	しゅるい
にんぎょう	にんぎょう	きって	さんぽ	にんぎょう
ねこ	けんきゅう	かって	でんしゃ	けんきゅう
こんど	がっこう	あさって	かたん	けっきょく
じっけん	ゆうびんきょく			しゃしん
けっきょく	こうえん			しょうかい
がっこう	さんぽ			ぎょうじ
たんとう	しょうかい			
ともだち	ぎょうじ			
ゆうびんきょく	おおきい			
どこ	おじいさん			
かたん	おばあさん			
ぎょうじ	おおさか			

(作文の書記形式を扱うのでひらがなで表示する)

いては、表1にあるような日本語学習者が誤りやすい日本語単語が日本語訳文中に現れるように、韓国語単語を選択・使用し韓国語文を準備した。韓国語文は全13問である。

調査後、被調査者による日本語訳文中に現れた誤りのある単語と音声項目との関係を明らかにし、考察を加えた。以下に調査シート例を示す。

調査シート例

<p>(問題) 1. 한국을 대표하는 음식은 무엇입니까?</p> <p>(回答) <b>かんこく</b>を<b>だいひょう</b>する<b>たべもの</b>はなんですか。</p> <p>2. 이번주 외국여행을 가려고 준비하고 있습니다.</p> <p><b>こんしゅう</b>が<b>いこくりょう</b>に<b>いくじゅんび</b>をしています。</p> <p>13. 할아버지, 할머니는 오사카에 살고 계십니다.</p> <p><b>おじいさん</b>、<b>おばあさん</b>は<b>おおさか</b>に<b>すん</b>でいます。</p>
---

( ) が分析対象語である。

被調査者は日本語学校あるいは大学、大学院に在籍する韓国人日本語学習者100名である。調査時に日本に留学して1年以上で、レベルは中・上級以上である。出身地は特に限定していない。

調査は2003年7月から2003年9月の期間に実施した。

### 3. 調査結果

#### 3.1 総合結果

表2に誤用分析の結果を示した。これは回答の日本語短作文にみられた音声項目の誤用数と誤用の割合<sup>(2)</sup>である。

韓国人日本語学習者の音声項目での誤りは先行研究で多く指摘されていたとおり最も多かったのが清音・濁音、長音の項目である。清音・濁音、長音だけで全体の誤用の83%にのぼった。

清音と濁音の誤用は両者の取り違えとして出ており、その割合は合計45%にのぼる。

長音の誤用は全体の誤用の38%を占め、不必要な長音の添加が15%、必要な長音の脱落が23%であった。

表2 日本語作文に見られる誤用分析結果

音声項目誤用実態		誤用数	誤用割合
清音と濁音	清音の濁音化	76	17%
	濁音の清音化	125	28%
長音	添加	69	15%
	脱落	103	23%
促音	添加	37	8%
	脱落	4	1%
撥音	添加	1	0%
	脱落	1	0%
拗音と直音	拗音の直音化	14	3%
	直音の拗音化	8	2%
その他	子音添加	3	1%
	子音交替	10	2%
合計		451	100%

#### 3.2 清音と濁音の取り違え、長音の添加と脱落

図1にきわだって多かった二つの項目をグラフで表した。清音と濁音の取り違え、長音の添加と脱落の状況が示されている。清濁の問題では濁音の清音化が清音の濁音化の1.6倍あり、長音の問題では脱落が添加の1.5倍あった。

図1 韓国人日本学習者の日本語作文に見られる音声項目(清音・濁音・長音)の誤用分析結果

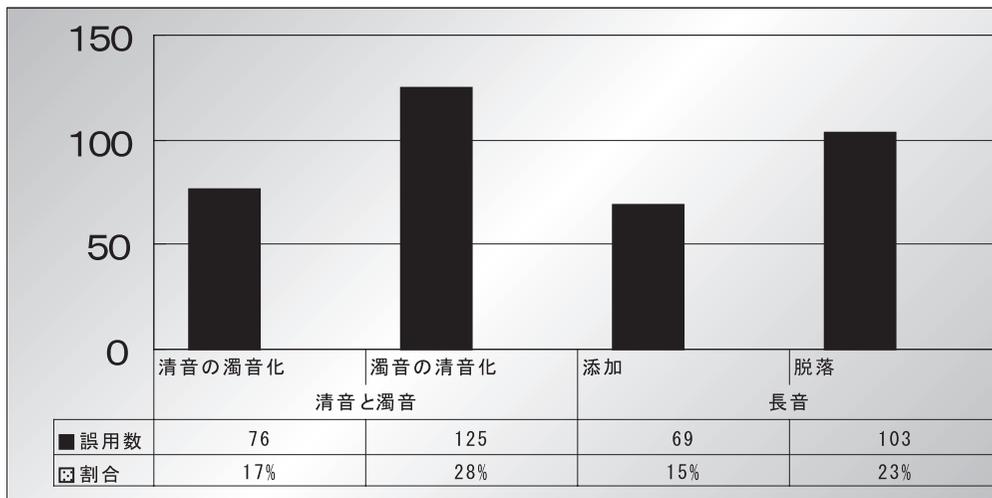


表3 長音の誤りの分析結果

順	単語	環境	誤答数	誤りのタイプ	
1	だいひょう	語末	35	だいひょ	脱落
2	こんしゅう	語末	6	こんしゅ	脱落
3	りょうこう	語末	18	りょこ、りょうこう	脱、添
4	うんでんめんきょ	語末	20	うんでんめんきょう	添加
5	ごうかく	語中	2	ご かく	脱落
6	いっしょ	語末	19	いっしょう	添加
7	いじょう	語末	9	いじょ	脱落
8	しゅるい	語中	7	しゅうるい	添加
9	にんぎょう	語末	16	にんぎょ	脱落
10	けんきゅう	語末	1	げんきゅ	脱落
11	がっこう	語末	4	がっこ	脱落
12	ゆうびんきょく	語中	2	ゆ びんきょく	脱落
13	こうえん	語中	0		
14	さんぽ	語末	20	さんぼう、さんぼう	添加
15	しょうかい	語中	10	しょ かい	脱落
16	ぎょうじ	語中	9	ぎょ じ	脱落
17	おおきい	語中	1	お きい	脱落
18	おじいさん	語中	0		
19	おばあさん	語中	0		
20	おおさか	語中	19	お さか	脱落

(作文の書記形式を扱うのでひらがなで表記する)

表4 長母音誤用タイプとその例

順	誤用タイプ	例
1	長音の脱落 103件 (60%)  語末の脱落は80件 語中の脱落は23件	だいひょう だいひょ、おおさか おさか
2	長音の添加 69件 (40%)  語末の添加は63件 語中の添加は6件	うんてんめんきょ うんてんめんきょう さんぼ さんぼう

表3には、長音の誤りの具体例を「長音の脱落」と「長音の添加」の二つに分けて示してある。

さらに長音の誤りのタイプを「語中」と「語末」に分けて調べたところ(表4)語中よりは語末において誤用が多く、脱落では語末が語中の3.5倍、添加では語末が語中の10倍という結果だった。

韓国語には母音の長短の区別が音韻的にはないので日本語での長短の弁別は難しいことが考えられる。そのため日本語を表記する際にも長音に関する誤りが多く、特に添加よりも脱落の方が、また語中よりも語末の方が、誤りが多いことが明らかになった。

#### 4. 考察

今回の韓国人学習者の日本語作文に見られる誤用調査では表2のように451件の誤用があった。その中の最多45%(201件)が清音・濁音の誤用であり、次は長母音で38%(172件)であった。この二つの項目の誤用が占める割合が83%(373件)にのぼっており、特にこの二つの項目が韓国人学習者の日本語作文に及ぼす影響が大きいことが確認できた。

##### (1) 無声子音と有声子音

無声子音と有声子音の区別は韓国人日本語学習者にとって伝統的に学習と運用が難しい項目である。韓国語では無声・有声の区別が弁別機能を持たず、特に語頭に有声破裂音と有声破擦音が現れない。韓国語の破裂音・破擦音は平音(無声 無気音・有声音 無気音)・激音(無声 有気音)・濃音(喉頭化した無声 無気音)という3項対立で、有声性は弁別の特徴ではない。それが干渉して、カ・タ・パ・チャ行の区別が混乱する。多くの先行研究によると有声音・無声音の聞き分けは語頭では混乱するが、語中では混乱はないという結果が出ている。そのため、今回の調査においても最

も誤用が多かったと思われる。

## (2) 長音

二番目に誤用の多かったのが長音である。韓国語では母音の長短による音韻的な対立は若干の語において現れるが、文字表記上には現れない。韓国語の長母音は自由母音と言って、短母音に比べて少し長い程度で、日本語のように1拍相当(実際には0.6~0.7拍程度)の長さをもつわけではない。

例	밤	말	눈	솔
	[bam]	[mal]	[nun]	[sol]
	[ba : m] <sup>(3)</sup>	[ma : l]	[nu : n]	[so : l]

しかし、現代ソウル方言を話す30代以下の人にはこの長短母音の弁別力はなくなっている。

ここで、韓国人学習者の発音および聴取にあらわれる問題点を改めて整理しておきたい。

日本語の長母音を短母音のように短く発音する傾向があり、この傾向は特に語中よりは語末に多い。

短母音を長母音のように長く発音する傾向がある。この傾向も特に語中よりは語末に多い。

長母音と短母音の聴取区別が困難である。

これらの問題は表記を調査した今回の調査結果とも一致していることから、表記に見られる音声上の誤りを適切に指導することによって、従来の発音指導とは別の形で日本語音声の習熟度向上に寄与できる可能性がある。表記には学習者の認識状況が明確に表れるため、表記に注意を向けさせることは、学習者に常に正確な認識を求めることになる。

日本語の長母音の場合、文字につく長音記号「ー」が長母音を表しており、長母音のあるなしの認識は「ー」の表記のあるなし、視覚認識への置き換えによって区別できることになる。語を視覚的補助要素とともに記憶させることにより、音声産出に好ましい結果をもたらすことが期待できる。

外国語の学習において必ず出てくる誤りは、そのつど直すだけではなかなか直らない。誤りを防ぐにはどうしたらよいか、どういう機械、教材を使ったらよいかを考える必要がある。その誤りが学習者の不注意から生じたものであれ、外国語に対する知識の不足から生じたものであれ、それを分析し適切な対策を立てないと誤りは減らない。誤りの原因を究明して対策を立てることによってはじめて誤りを防ぐことが出来

るのではないだろうか。

## 結 論

本稿では中・上級以上の韓国人日本語学習者（在日留学生）に日本語短作文の調査を実施してその結果現れた音声的問題項目と先行研究との比較を行い、考察を加えた。その結果、韓国人日本語学習者の日本語作文に見られる誤用の大半は清音と濁音の区別の誤りと長母音の添加と脱落に関するもので、今回の調査でも清音と濁音の区別に関するものが45%を占め、長母音に関わるものは38%であった。従来の研究では清音・濁音の誤用が深刻とされていたが、今回の調査では長母音の誤りも多く見られ、日本語作文に及ぼす影響が非常に大きいことが明らかになった。したがって、これらの音声項目の教育にもっと力を入れる必要があると思われる。

これまで、多くの先行研究によって、日本語の長音は韓国語を母語とする日本語学習者にとって発音・聴取の両面において難しい音声であるという指摘がなされてきた。しかし書くという、音声の認識状況が明瞭に表示される側面からなされた長音の誤りについての研究は見当たらない。音声教育と作文教育を連携させることにより、より正確性を高めることのできる教育ができるものと考えられる。そのためにはさらにこの面からの研究が進められる必要があると思われる。日本語の長音がなぜ難しいのか、何が難しいのかについてもさらに研究が必要であろう。これが今後の課題であり、新たな日本語音声教育法の開発をめざして研究を進めていきたい。

### [注]

- (1) 韓国人学習者にとって習得と運用が難しいと予想される日本語音声項目に関する先行研究に基づいて整理したものである。
- (2) ここでの誤用の割合というのは今回調査した音声項目の単語の誤用を100%にして割り出した数字である。
- (3) 韓国語にも音の長さは単語の意味を弁別する力があって長音と短音の意味は違う。しかし、長音の単語も日本語の mora 音と同じく完全な1拍を持たない、語末になる場合（二音節以下に来る場合）は例のように短くなる傾向がある。

例：	밤	말
	[ba : m]	[ma : l]
	군밤	한국말
	[gumbam]	[hangukmal]

### 参考文献

- 生越直樹（1991）「韓国における日本語教育概観」『講座日本語 日本語教育16』明治書院
- 梅田博之（1985）「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」『日本語教育』55、日本語教育学会
- 鹿島央（1989）「長音の音響的特性について - 日本語学習者と日本人との比較」『言語文化論集』11

- 1号 pp 267 - 276

- 木村正武・中岡典子(1990)「撥音と促音 英語・中国語話者の発音」『講座日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻(下)』明治書院 pp.139 - 177
- 粕谷英樹・佐藤滋(1990)「長音・二連母音・二重母音 日本語話者と英語話者の場合」『講座日本語と日本語教育第3巻日本語の音声・音韻(下)』明治書院 pp.178 - 197
- 斎藤純男(1997)『日本語音声学入門』三省堂
- 杉藤美代子編(1989)『講座日本語と日本語教育2、3日本語音声・音韻(上、下)』明治書院
- 土岐哲(1989)『講座日本語と日本語教育 第13巻 日本語教育教授法(上)』明治書院
- 土岐哲・前川喜久雄・今泉敏・小林節子(1997)「音声学の教育の現状と問題点」『音声研究』1(1)
- 土屋千尋(1992)「モンゴル人学習者の日本語長母音習得の過程」『日本語の韻律に見られる母語の干渉(2)(3)-音響音声学的対照研究』「日本語音声」D1班1991・1992年度研究成果報告書
- 助川泰彦(1993)「母語別に見た発音の傾向;アンケート調査の結果から日本語音声と日本語教育」『日本語音声』研究成果刊行書 日本語音声と日本語教育(水谷修ほか編) pp.187 - 222
- 戸田貴子(1998)「日本語学習者による促音・長音・撥音の知覚範疇化」『文藝言語研究言語篇』筑波大学文芸・言語学系 pp.65 - 82
- 戸田貴子(2001)「第二言語としての日本語の習得研究」4号『第二言語習得研究会』
- 中東靖恵(1998)「韓国語母語話者の英語音声と日本語音声;聴き取り・発音調査の結果から」『音声研究』第2巻、第1号 pp.72 - 82
- (1999)「韓国母語話者の英語音声と日本語音声」『音声研究』2 - 1、日本音声学会
- 前川・助川(1995)「韓国人日本語学習者による日本語長母音の知覚」『第9回日本語音声学会全国大会予稿集』 pp.40 - 45
- 馬瀬良雄・中東靖恵・崔昇浩・邱明麗(1997)「韓国語・台湾語話者の日本語音声の対象研究」『日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 松崎寛・河野俊(1998)『よくわかる音声』アルク
- 松崎寛(1999)「韓国語話者の日本語音声-音声教育研究の観点から-」『音声研究』第3巻3号、日本語音声学会 明治書院、pp.303 - 331
- 皆川泰代(1995)「日本語学習者における長音知覚諸要因 英語・韓国語話者の場合」『平成7年度日本語音声学会全国大会予告集』
- 山田幸宏(1963)「朝鮮人の日本語認知に於ける難易度の測定について」『日本語教育』3、日本語教育学会
- 横井和子(1998)「学習者の発音上の問題点指摘とその効果 大規模クラスを対象にした発音チェックとフィードバック」『平成10年度日本語教育春季大会予告集』 pp.159 - 164
- 横山和子(1997)「類型論的有標性と朝鮮語話者の日本語閉鎖音の有声・無声の対立の習得」『言語文化と日本語教育』14、お茶ノ水女子大学日本語文化学会
- 関光準(1987)『日本語の音声(1)(2)』アルク
- (1987)「韓国人の日本語の促音の知覚について」『日本語教育』62号、pp.179 - 193
- (1989)「韓国語話者の日本語音声における音律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』第68 pp.175 - 190日本語教育学会
- (1990)「日本語と朝鮮語のアクセントとイントネーション」『講座日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻(下)』明治書院、pp.303 - 331
- (1996)「韓国人日本語学習者の発話と聴取に見られる日本語のイントネーションの問題点」『日本語文学』第2輯 韓国日本語文学学会、pp.51 - 72

- (2000)「日本語音声研究現状と課題」『日本語学シリーズ1』宝庫社
- 白同善(1993)「日本語及び韓国語の音声習得における言語間干渉」、『言葉の科学』、名古屋大学総合言語センター言語文化研究委員会
- 李明姫(1986)「韓国における日本語初級課程学生の聴音能力と発音能力実態調査」『国語学研究』26、東北大学文学部
- 李炯帝(1992)「日本語と韓国語における長音の音響音声学的対照研究」『日本学報』29、韓国日本学会
- (1993)「日本語長母音の知覚に関する研究」『木浦大学校論文集』14 - 2号 pp.1 - 13
- 許晁会(1991)「日本語の中の外来語表記と長音記号「-」について」『日本学報』第26輯「韓国人学習者の日本語発音および聴取能力分析」 語頭破裂音と破擦音を中心に